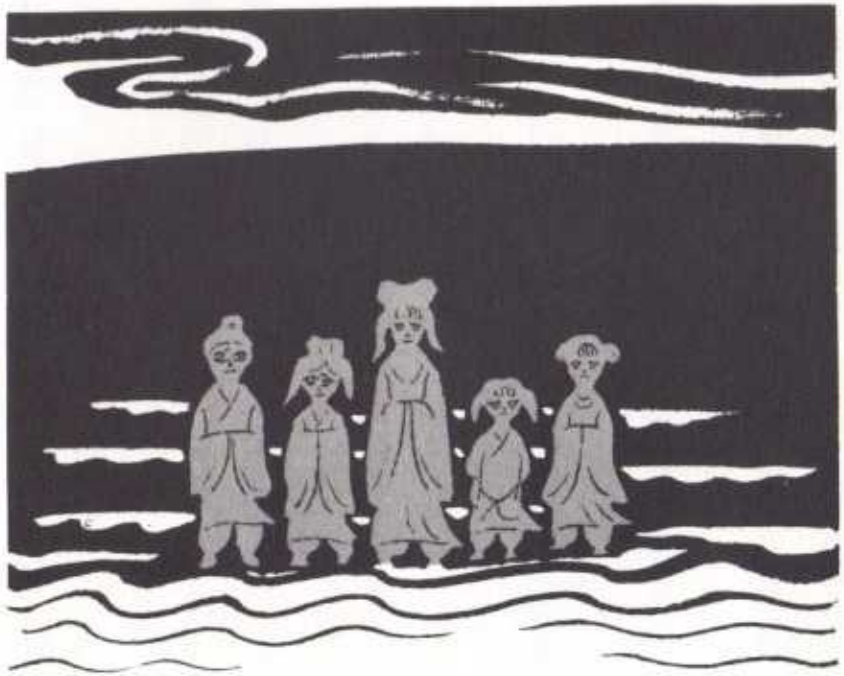
五人は、浜坂へくると、なぎさにならんで、じっと村のほうを見ておった。村へはいると生きてはおれんちゅうもんで、浜におった。

十日待った。浜にじっとすわっておった。

ひと月待った。それでも太郎はあらわれん。五人の子どもらは根気よう待った。一年待っても、太郎は見えなんだ。

それでな、五人の子どもらは、とうとう、じりっ、じりっと、なぎさから、村のほうへ近づいていった。それでも太郎は見えん。そこで子どもらは、もうちいっとばかり村へ近づいた。



すっと、そこは村の入口じゃった。「ああ、ここから浜坂の村じゃわ。」と思うたとたん、どうしたもんじゃ、五人の子どもらは、五本の石の木になってしもうたって。

ちょうどそのとき、太郎は、村の中のじぶんの家で、息をひきとったとこじゃった。

五本の石の木は、太郎の死んだことは知らんもんで、ずうっと、いまでも村のほうむいてどっしり立っとる。それで、いまじゃこの浜坂を、石立の村というようになったって。

海の荒れた夜にゃ、乙姫が、太郎や子どものこと思うて呼ぼっとる声が、風にのって、この石立へきこえてくっとい。

（石川県松任市石立町の話　再話＝小納）